

朝鮮通信使の通航と迎接に関する研究

吉田, 智史

<https://hdl.handle.net/2324/7182268>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (文学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

| | | | | |
|--------|-------------------|------|-----|-------|
| 氏名 | 吉田 智史 | | | |
| 論文名 | 朝鮮通信使の通航と迎接に関する研究 | | | |
| 論文調査委員 | 主査 | 九州大学 | 准教授 | 岩崎 義則 |
| | 副査 | 九州大学 | 教授 | 森平 雅彦 |
| | 副査 | 九州大学 | 准教授 | 荒木 和憲 |
| | 副査 | 九州大学 | 講師 | 国分 航士 |

論文審査の結果の要旨

上記の論文は、朝鮮通信使という近世日本の対外関係における重要なテーマにおいて、国家間外交の課題であった使節の海路行程（対馬から大坂）における安全確保をめぐる対策や対応の実態を、主に対馬藩と萩藩の史料を分析することで明らかにすることを意図したものである。

第1部第1章では、日朝外交において主要な役割を果たした対馬藩による通信使の先導・警固の体制が、藩の総力を挙げて編成されたこと、また、藩財政の悪化を背景として、船舶の調達方法や水夫の運用等を工夫して、編成の合理化が進められたことを明らかにした。同第2章では、使節派遣に関する日朝間の合意文書「講定節目」を分析。そこで、延享5年（1748）の「講定節目」より、海路の安全対策の条項が明記された意義を、安全をめぐる日朝間の合意形成という観点から論じた。

第2部第1章では、朝鮮国からの礼物となる鷹と馬に着目。対馬藩と迎接役諸藩との緊密な協同・連携によって、様々な困難をともなう生類の移送実態を解明した。この生類移送を前提とした鷹と馬の贈答が、朝鮮国王と将軍との安定した関係性の構築に寄与したとし、通航・迎接と国家儀礼との関係性にも言及した。同第2章では、朝鮮通信使の通航・迎接をめぐる情報収集・伝達・交渉の様相を解明するため、萩藩の公儀人と大坂留守居に着目し、両者の機能と役割が同藩迎接の要であったと指摘した。同第3章では、通信使の安全確保策において、萩藩の船手組頭による海上案内と、藩領の瀬戸内海沿岸各郡の代官による通航支援が重要な要素であったことを解明した。

第3部第1章では、通航支援のために動員された人員と船舶の実態を示し、それらが萩藩の安全確保策を支えたこと、また、過重な負担と浦の困窮が、宝暦14年（1763）の通信使の航行行程に影響を与えたことを指摘した。同第2章では、同じく宝暦14年の萩藩における通信使の通航・迎接の諸経費（銀2、700貫目余）の構造を分析し、経済的負担の詳細を解明した。あわせて、当時の萩藩主が、挙藩一致を標榜し、通信使関係経費の負担軽減と「大切之御役用」の両立を図ったことを論じた。同第3章では、萩藩と福岡藩の下行（食料提供等）をめぐる対立が、通信使の通航・迎接に伴う負担の限界を示すものであり、両藩の対立を文化8年（1811）の対馬易地聘礼の前史と位置付けた。

以上、本論文により、朝鮮通信使の航路と迎接に関する、船舶・人員の動員と編成、情報の収集と伝達、生類移送と贈答儀礼、通航支援・下行をめぐる負担や藩間対立など、重要な実態の数々が解明された。今後、本論文が当該分野の研究の進展に寄与することは疑いない。

よって、本調査委員会は、本論文の申請者が、博士（文学）の学位を授与するに十分な能力を持つものと認めるものである。

